

企画展 熊本籠城戦

一萬死ヲ期シ熊本城ヲ 保タザルベカラズ

ごあいさつ

西南戦争一その^{きも}肝は、つまるところ熊本城（熊本鎮台）だったといえます。

名城の誉れ高い熊本城が落ちれば、各地の不平士族が西郷に同調、蜂起し、戦乱が全国に飛び火する可能性があったからです。

杞憂ではありません。実際に熊本をはじめ九州各地の士族が党薩諸隊として参戦していましたし、遠く高知・山形でも蜂起の動きがあり、板垣退助・菅^{すげ さねひで}実秀がそれぞれにこれを制止したという経緯があります。

熊本城堅守一それは政府軍にとって戦いの主題でした。

熊本鎮台司令長官 谷 干城

「熊本ノ存亡ハ天下人心ノ繫ル所」

参軍 山縣有朋

「唯萬死ヲ期シ熊本城ヲ保タザルベカラズ」

指揮官たちはその意義を明確に捉えていました。

西南戦争といえば「田原坂の戦い」のイメージが強いですが、これも包囲された熊本城救援のために南下する政府軍旅団とこれを阻止せんとする薩摩軍の攻防でした。西南戦争の肝一薩摩軍の猛攻に耐え、政府軍勝利を導いた熊本城。

熊本地震からの復旧が進む今、52 日間の籠城戦を振り返ります。



1 熊本城炎上の謎

征討令が発せられた2月19日、熊本城天守・本丸御殿などが炎上する。その原因は、近年の研究でも定説をみていないが・・・

- ① 国家財産が焼失したにも関わらず、その**正式報告が無い**。
- ② 現場にいた参謀 児玉源太郎が後に語った内容には虚偽が多く、**事実を隠蔽する意図**があったと想像される。
- ③ 電信記録は、火災発生直後には「**鎮台自焼セリ**」と打電しているが、後になると「怪火」など原因が不明となっている。
- ④ 本丸御殿＝鎮台本営の発掘出土品（被熱資料）の偏在性から、**火元は司令部**と考えられる。奥まった位置にあり、限られた者しか出入りできない場所である。

以上、西南戦争 140 年記念シンポジウム「熊本城炎上の謎に迫る！」では、**鎮台が自焼**し、これを隠匿した可能性が高いとした。

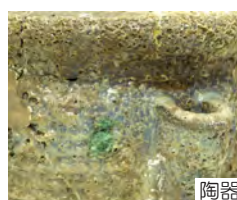
薩摩軍に怯える籠城兵を背水の陣に追い込み、また、近代戦においては砲撃目標となるだけの天守を焼却して籠城準備の仕上げとしたのであろう。



「熊本城天守并民家焼亡細見之圖」



磁器



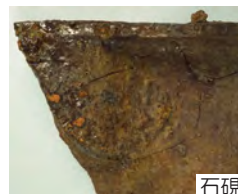
陶器



陶器



石硯



石硯



ガラス瓶



板ガラス



銅銭

焼け爛れた出土品

2 籠城戦 52 日間—経緯と主な戦闘

開戦直前の 2 月 14 日、熊本鎮台は籠城を決議する。
前年の「神風連の変」から兵卒の士気が復さず、薩摩軍はもとより精強・・・
野戦を不利とし、熊本城の防御力に拠ることとしたのである。後、鎮台は城内の
守備強化に努めていく。



大山綱良

2 月 19 日、鹿児島県令大山綱良の使者がもたらした「薩摩軍の城下通過の際に鎮台兵は整列して陸軍大将西郷の指揮を受けること」との通知に対し、樺山資紀参謀長は「兵器ヲ携へ国憲ヲ犯」す者は、たとえ西郷であっても「兵力ヲ以テ鎮圧スヘキ」と回答する。

2 月 21 日、川尻に到着した薩摩軍の偵察と陣所の放火を目論み、鎮台は 2 箇中隊（約 300 名）を派兵。兵員数が多いことから威力偵察とみられる。



樺山資紀

以上、熊本鎮台は攻城を誘導した節がある。これによって、薩摩軍は鎮台の明確な戦意を、また、鹿児島出身で西郷と懇意でもあった樺山の回答から内通者も期待できないことを悟る。
かくして薩摩軍は熊本城攻撃を決し、籠城戦へと突入するのである。

日付	戦闘名	籠城軍		薩摩軍	
		兵数	死傷者数	兵数	死者数
2 月 21 日	川尻偵察戦	約 300	鎮台：死 2	約 1,500	0
2 月 22 日	熊本城総攻撃	約 3,300	鎮台：死 28, 傷 78 警視隊：死 1, 傷 16 / 計 123	最大 9,000 ～ 10,000	28
2 月 23 日			鎮台：死 5, 傷 19 警視隊：死 2, 傷 5 / 計 31		21
2 月 27 日	千草小学校の偵察戦	約 250	鎮台：死 5, 傷 32 警視隊：死 6, 傷 2 / 計 45	約 600	21
3 月 12・13 日	段山の戦い	約 650	鎮台：死 40, 傷 93 警視隊：死 21, 傷 67 / 計 221	約 750 ～ 800	73 以上
3 月 27 日	京町の出撃	約 700	鎮台：死 19, 傷 73 警視隊：死 18, 傷 33 / 計 143	約 800	18
4 月 8 日	突囲戦	約 1,000	鎮台：死 23, 傷 67 警視隊：死 6, 傷 5 / 計 101	約 1,100	40
4 月 14 日	熊本城解放	薩摩軍が包囲を解き、衝背軍別働第 2 旅団（先鋒山川 浩中佐）が入城。			

僧五岳「熊本城之作」—唯有此城遮賊氛—

「周りには薩摩軍が群がり、城下は戦火に襲われ、まさに火の国である。兵糧も尽きるなか、城兵は力を尽くして籠城に耐え、賊軍は逆巻く大波のように去った。嗚呼、日本国中、ただこの城だけがあって賊軍の勢いを遮った（唯有此城遮賊氛）。城を守る者、それは谷少将。城を築いた者、それはかつての鬼将軍（加藤清正）である。」

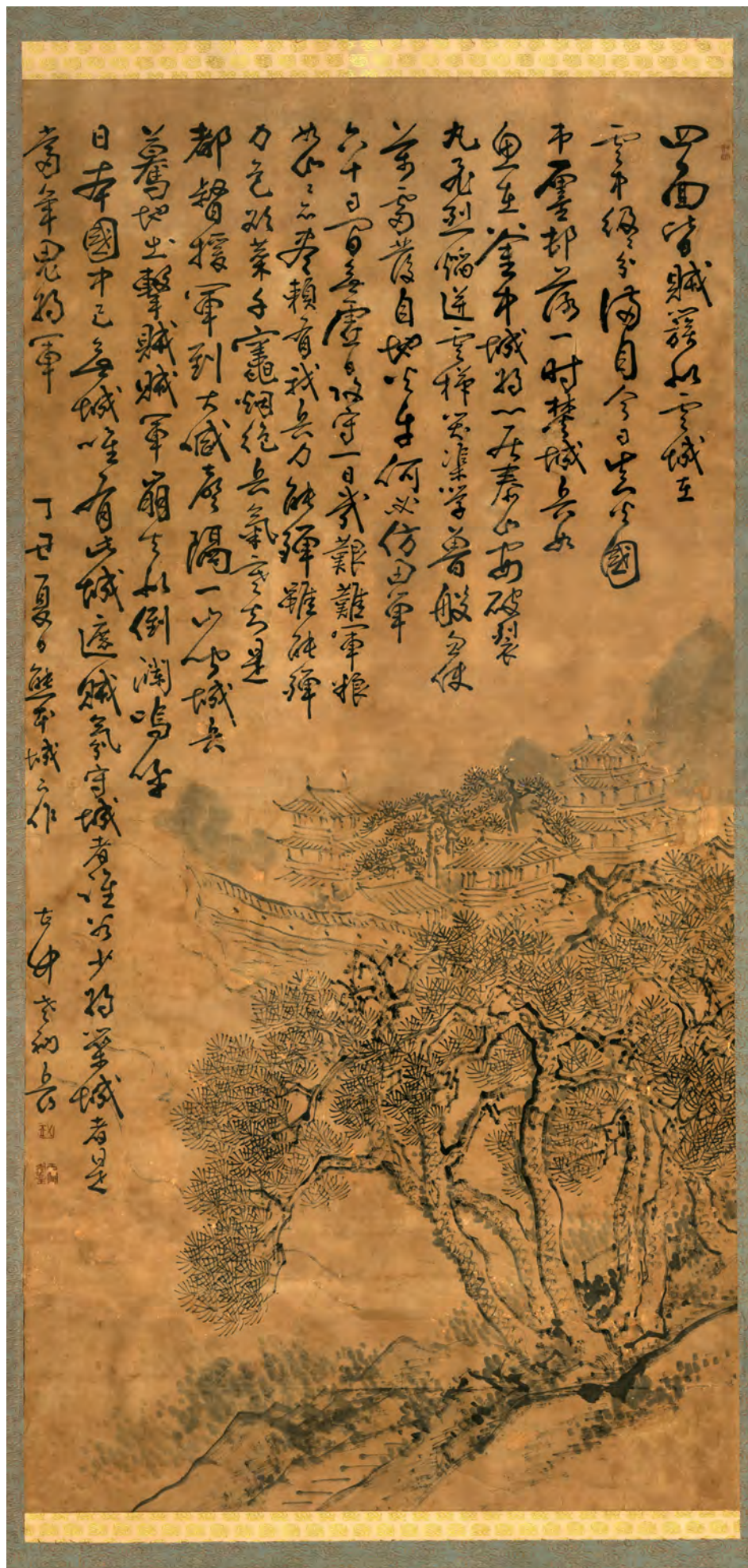
「丁丑夏旦」、西南戦争中に詠んだもので、高橋公園の谷干城銅像の台座に「情景八僧五岳ノ詩一 躍如タリ」として、この漢詩が刻まれている。



谷 干城銅像

※僧五岳（平野五岳）1809 - 1893 年
現在の大大分県日田市の人。学問を
広瀬淡窓に、絵画を田能村竹田に
学び、詩・書・画に秀で「三絶」
と評された。

西郷とも交友があり、明治9年
11月、鹿児島で西郷と面談し、
この時、拳兵を思いとどまるよう
説得したといわれる。



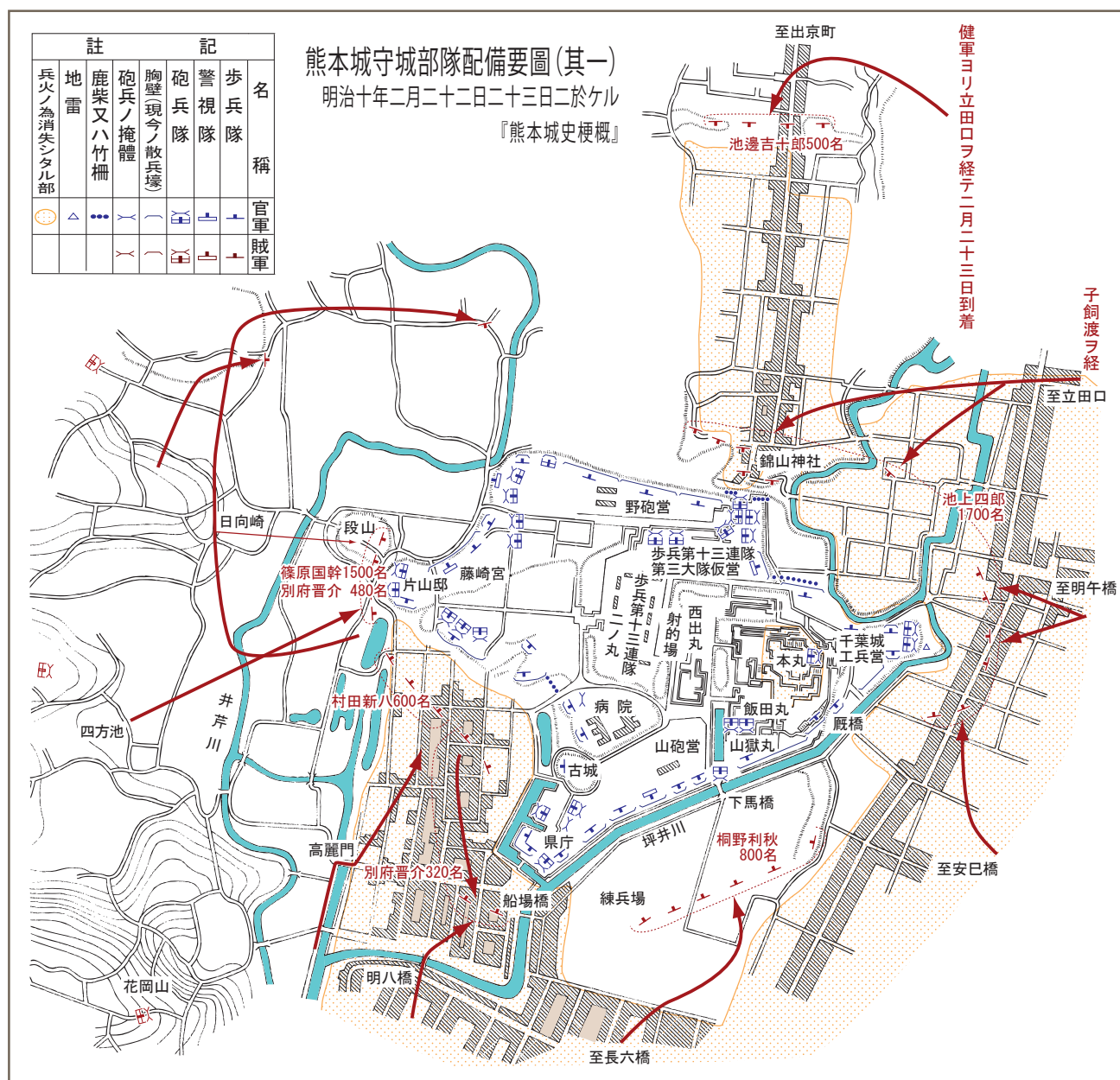
3 熊本城総攻撃

「大小砲声轟天殺傷相当」・・・2月22・23日の熊本城総攻撃。熊本城は薩摩軍による四方からの猛攻にさらされる。

これに向け、鎮台は工兵第六方面第1園区長 別役政義のもと、熊本城を近代戦に相応しく改造していた。

柔構造で砲撃からの防御に適さず、射撃の効率性も低い木造の櫓建物を廃して砲台や胸壁を築く。また、要所に壕を掘り、柵を組み、地雷を埋設していったのである。砲台は城の突出部に重点的に設置し、各所から側射・斜射して十字火を発揮できるよう、稜堡式城郭ともいえる防御態勢をとった。

「別に方略なし」と力攻めを試みた薩摩軍であったが、堅城鉄壁の熊本城を落とすことはできなかった。



資料紹介—熊本城攻防戦の錦絵 その 1 —

西南戦争の錦絵は新聞記事を視覚化する役割を果たし、人気を得て 1 年間で約 600 種が刷られた。現地を見ていない東京・大阪の絵師が記事をもとに想像で描いたもので、誤りや誇張が多い。



「鹿兒島の賊軍熊本城激戦圖」

籠城した軍医の日記に、飛び交う砲弾が流星のようだとあり、砲弾の表現はこれを髣髴する。



「鹿兒島征討一覽」

緒戦で戦死した與倉 13 連隊長を大きく描く。樺山参謀長の一騎打ちは明らかな創作。



「鹿兒嶋ノ賊徒熊本ニテ地雷火ノ圖」

鎮台が埋設した地雷が爆発するなか、篠原国幹が奮戦する。甲冑姿は明らかな創作。

資料紹介—熊本城攻防戦の錦絵 その2—



「鹿児島士族熊本安政橋戦争ノ図」

4月8日の突圍戦を描いたもの。先鋒どうしの抜刀戦は明らかな創作。



「花岡山の卒陣」

城内からの激しい砲撃のため、実際には花岡山に薩摩軍本陣は置かれなかった。



「熊本城ノ将校賊軍嘲弄之圖」

鎮台司令官たちの酒宴の様子を描く。羨ましそうにたたずむ薩摩軍将兵を木に登った品川弥二郎が眺めている。実際には食料が枯渇し、酒宴どころではなかった。

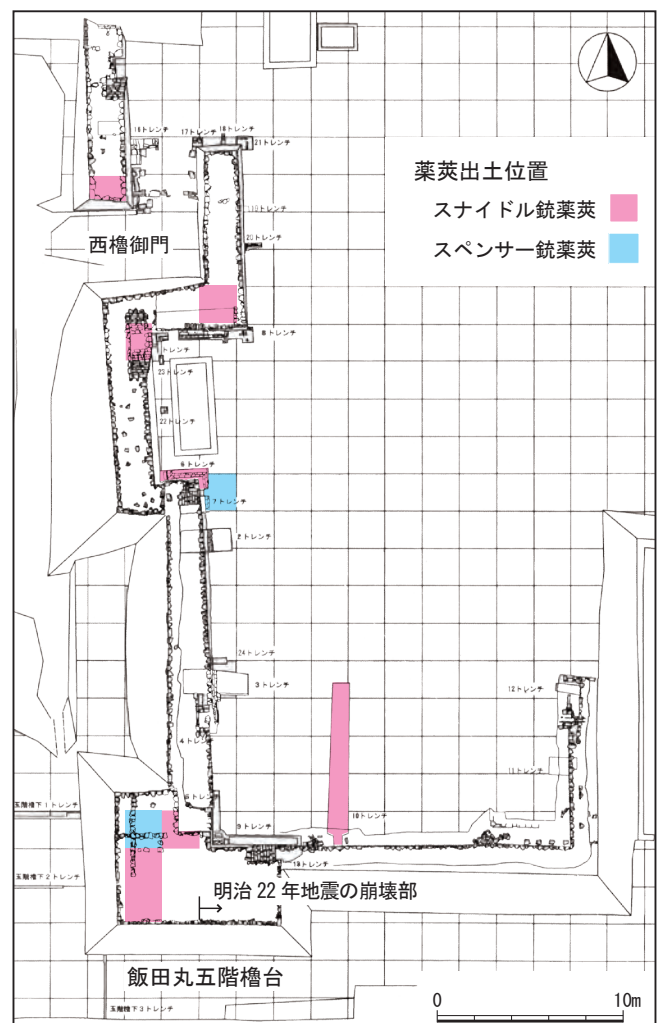
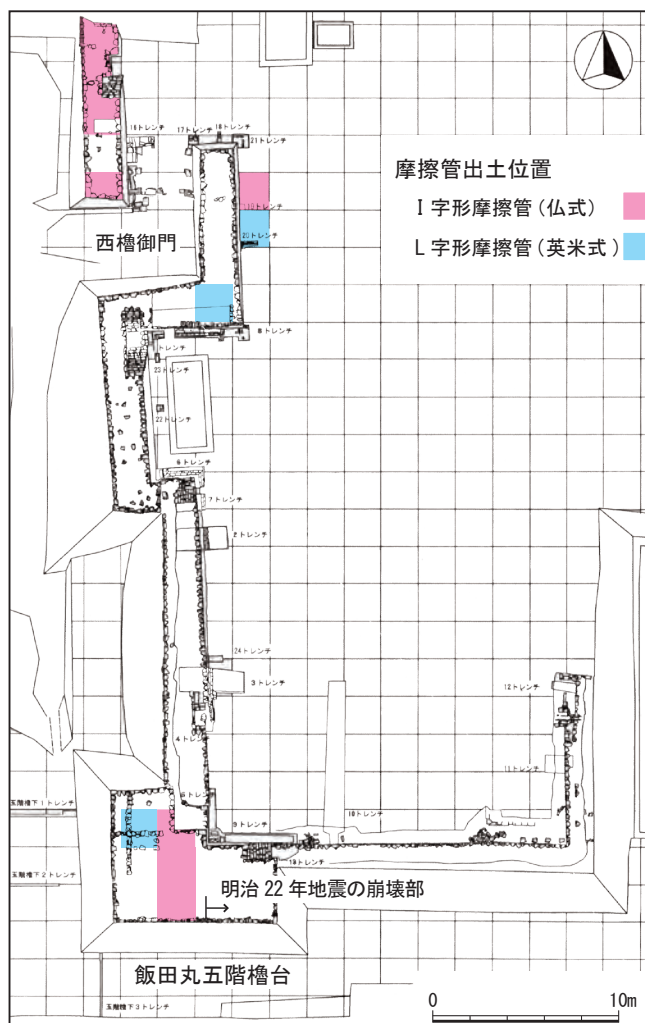
4 飯田丸の砲撃戦

飯田丸における砲撃戦は、籠城各拠点のなかでも最も激しいものであった。飯田丸には、**四斤砲 2 門と臼砲 1 門の砲台**が設置され、兵器庫や野砲工廠があって小銃の修理や弾薬の供給を行なうなど、防御体制が強化されていた。

正面突破を試みて城近くに迫る**薩摩兵への攻撃**だけでなく、激戦地への**援護射撃**や安巳橋・花岡山などの**砲台への射撃**も行なわれた。寺原に砲台を築こうとしているところを阻止してもいる。

こうした拠点は、当然、薩摩軍からの**砲撃目標**ともなる。榴霰弾により兵器庫の屋根が蜂の巣のようになったなど、戦況が膠着した3月中旬以降も、飯田丸では連日のように激しい砲撃戦が展開された。

加藤清正は、飯田丸を**本丸南側の防御を担う重要拠点**としたが、このことは西南戦争において改めて証明されたといえる。



飯田丸発掘資料の出土分布図

摩擦管（大砲の発射時に使用）やスナイドル銃薬莖の出土分布から、五階櫓台と西櫓御門付近に砲台が、その脇に銃卒が配備されて、薩摩軍との攻防に鎧を削っていたと考えられる。

資料紹介—西南戦争の頃の写真 その 1 —



坪井川・下馬橋付近

馬具櫓の縁に堡藍が並ぶ(赤丸)。総攻撃では、薩摩軍正面攻撃の最前線となった。



千葉城の砲台から立田山を望む

竹を編んだ柵で囲った基礎を築き、堡藍を立て並べた間に大砲を設置する。熊本鎮台が明治 11 年に作成した「両軍配備図」によれば、千葉城は山野砲 1 門、臼砲 2 門が設置される重要な攻撃拠点であった。



段山南西部から石神山を望む

3 月末の水攻め前に撮影。鎮台が設けた井芹川沿いの堡藍が並ぶ。



旧花畑屋敷の仮兵舎
藁屋根・藁壁の長屋建物が並ぶ。



榎島坂（片山邸・藤崎宮への北からの登り口）
石垣上（正面奥）に木柵・矢来が組まれている。

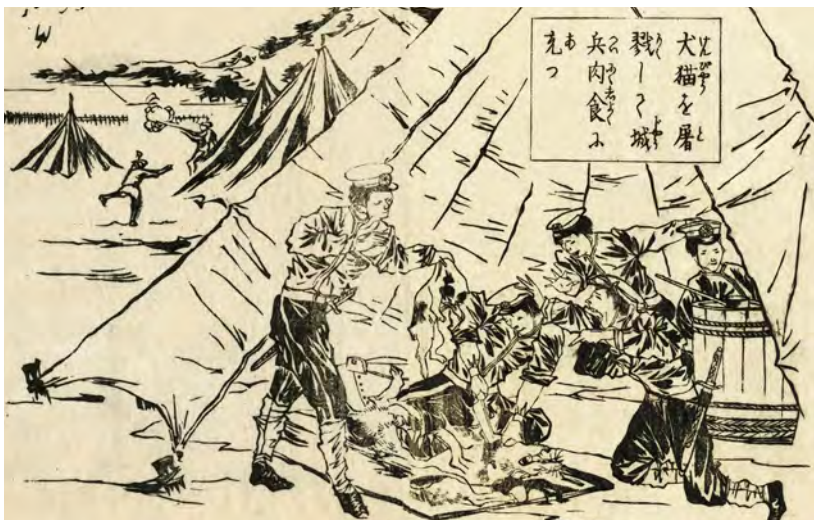


多数の弾痕が残る土蔵
現在の三の丸広場（熊本博物館西側）。弾痕は 2 月 22・23 日の総攻撃における砂薬師坂をめぐる戦闘によるものか。

5 籠城中の食料事情

古今東西、籠城の際には食料の確保が必須となる。

西南戦争でも籠城約 3,800 人（土官家族・県官吏を含む）の食料確保が大きな課題であった。しかし、出火により 30 日間分の糧米を焼失したうえ、**長引く籠城は飢えとの戦いでもあった。**



『参考鹿兒嶋新誌』第四輯下（明治 11 年）

2 月 19 日	天守などの出火により備蓄した 30 日分の食料が焼失。
2 月 19・20 日	会計部が市街・近郊村で食料を調達、約 20 日分を補充。 戦場において通常は支給する夜食を廃する。
2 月 22・23 日	薩摩軍による総攻撃、本格的な籠城開始。
2 月 25 日～	随時、城外各所に潜入。米・粟・味噌・酒などを調達する。 ※薩摩軍主力が県北部に移動し、広く長い守線に兵力不足をきたしたため、城兵がこれを突破して食料を調達することができた。
3 月 12・13 日	段山の戦い。
3 月 12 日	薩摩兵が戦死した警視隊池端警部の臓腑のなかを見たところ、麦飯のみで城内の食料不足を確認する。
3 月 13 日	段山の戦いの戦果として、粟 38 俵ほか、小麦・玄米・干大根・大豆・唐芋・餅米・濁酒などを獲得する。
3 月 19 日頃	負傷兵のために水堀の魚を捕り、城内で豆腐・飴などを作る。
3 月 26 日	薩摩軍、築堤を築き水攻めを開始。
3 月末	食料不足が深刻化する。
4 月 4 日	食事は、司令官は朝夕を粥、昼を粟飯、各隊は朝を粥、昼夕を粟飯、工兵及び役夫は全て粟飯とする。後日、司令官は全て粟粥となる。
4 月 8 日	突圍戦。米 746 表ほかを獲得し、食事は米粥となる。
4 月 11 日頃	将校夫人らが城内の野蒜を摘み、ひたし物を作る。
4 月 14 日	薩摩軍の包圍が解け、粥を止めて米飯を食べる。
4 月 15 日	援軍（各旅団）が米・酒・肉を城内に搬入する。 「城中の空庫一時に充実し、積日飢渴の苦しみを免れたり。」

6 医師も戦った一戦傷者の救護

籠城軍の戦死者約 250 名、戦傷者約 560 名。

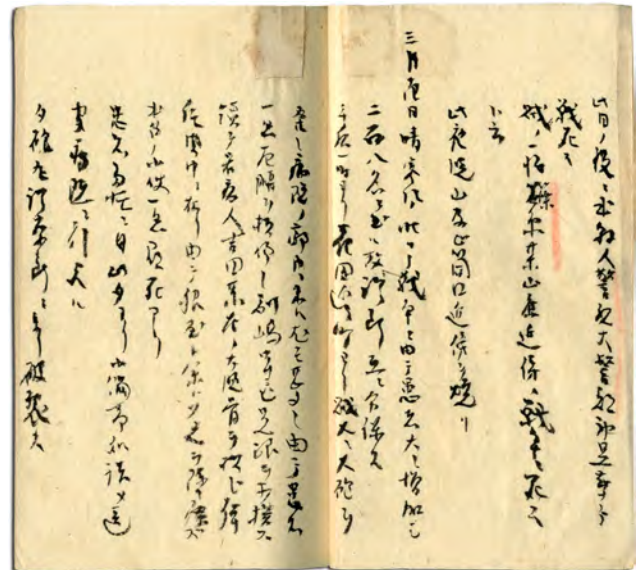
西南戦争時、現在の国立病院の位置に病院が置かれ、鎮台・警視隊の軍医約 20 名ほか、看病人（医療事務員）・看病卒約 30 名がその救護にあたっていた。

ここで紹介するのは軍医 木原義實の働きである。現在の山都町出身で、長男誕生に伴う帰省時に西南戦争が勃発。志願して籠城に加わり、戦傷者を救護した。

彼の残した日誌には凄絶な医療現場の様子が綴られている。

最大の激戦 段山の戦いの翌日、3 月 14 日の日誌には・・・

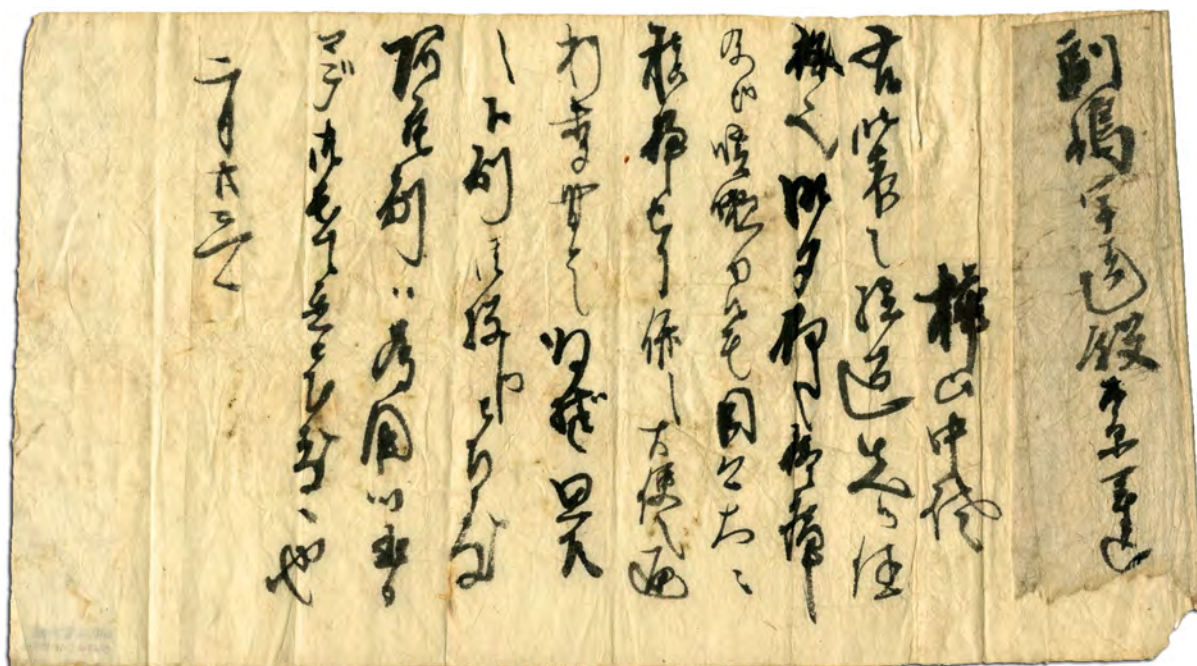
「患者が 208 名に増えたため、分散収容した。午後から病院に砲撃があり、小使 1 名が即死、患者 1 名が負傷。看病卒も大腿骨を負傷し、弾片を除去した。夕方にも砲撃があり、夜は当直で病院内を巡回した。」



「明治十年西南戦役籠城戦闘日誌」

木原は、銃創を負った樺山参謀長の治療も担当しており、上司の副島軍医に状況を報告している。

「ひとまず脈は良いようです。昨夕わずかな痛みと咳がありましたが、現在は鎮静しています。下剤を投与したのでアヘンは使用しないようにしています。」



副島軍医への報告

鎮台告諭

籠城約2週間が経った3月5日、鎮台首脳部は將兵に向けて告諭を掲示する。

「民間人の金品・食料・家畜などを強奪するな」、「女性に乱暴するな」、
「見張りの時に眠ったり持ち場を離れたりするな」、「捕虜を殺戮するな」、
「酒を呑みすぎるな」・・・そして「これらに反する者は厳罰に処す」。

四民平等の兵制にもとづく徴兵令が施行されて、まだ4年・・・

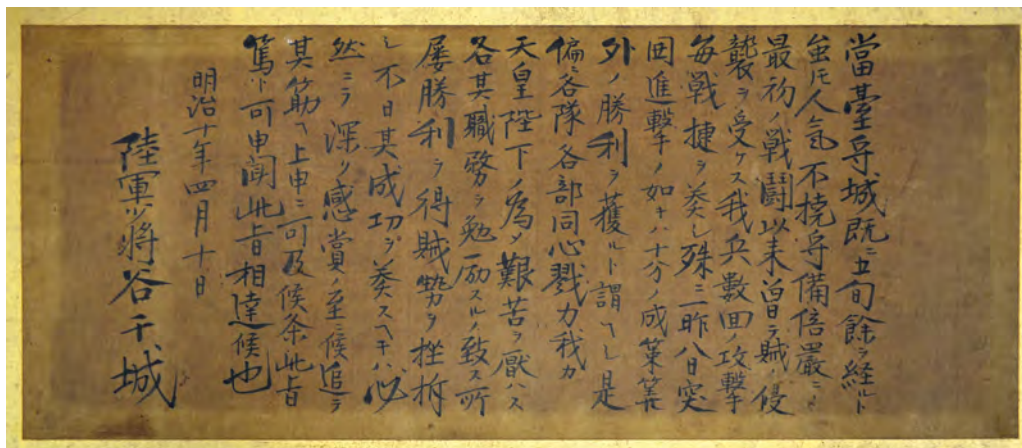
忠誠心を持ち、上官の命令に服従するという軍隊の原則を庶民兵たちに理解させ、定着させるのは生易しいことではなかった。



129.0 × 40.5 cm

司令長官谷 干城の感状

感状は、戦功などを賞して主君や上官から与えられる文書である。部下の功績を調べ、卓越したものを表彰（感状）するのは指揮官の仕事であった。



* 52.6 × 21.8 cm

突圍戦の感状

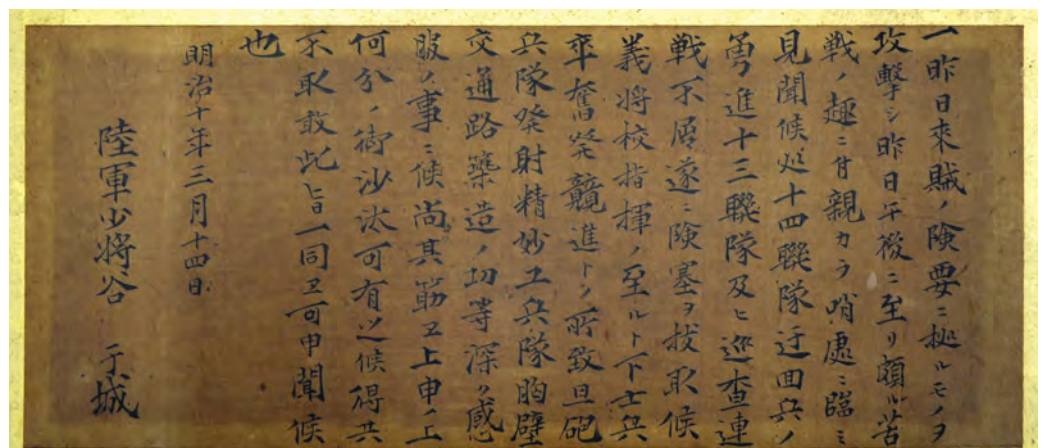
(明治10年4月10日付)

4月8日の突圍隊・侵襲隊の出撃により薩摩軍の包囲を破り、衝背軍と連絡がとれたことや食料を確保したことを賞したものである。

段山の戦いの感状

(明治10年3月14日付)

熊本城攻防戦で最も激しい戦い、3月12・13日の段山の戦いでの特出した働きを賞したものである。



* 52.6 × 22.2 cm

7 最前線に立つ司令官たち

江戸時代に生まれ、武士として育った彼ら。その血の故か・・・

籠城軍の司令官たちは、本来は後方で指揮をとるべきところ、**激戦の最前線に出ていく。**
兵卒の士気を鼓舞するためであったのだろうが・・・

熊本鎮台参謀長 樺山資紀 2月21日、川尻に到着した薩摩軍への偵察として2箇中隊を派兵した際、これに同行。総攻撃初日の2月22日には、藤崎宮の砲台近くにおいて被弾している。

歩兵第13連隊長 與倉知實 2月22日、激戦地の片山邸（現在の藤崎台童園）において、雨あられのような敵弾のなか匍匐しながらも最前線に出向いたところ被弾、戦死してしまう。

なお、ともに籠城していた鶴子夫人は、同日に娘を出産している。

警視隊総指揮長 綿貫吉直 3月13日の段山の戦いでは、前日に1・2番組長が死傷したことから出撃。自ら指揮をとっている。籠城戦後の御船の戦いでも最前線に立ち、数箇所銃創を負った。



戦死時に着用していた軍衣。
左の胸部と袖が切り裂かれており、これは救急にあたって服を脱がせる際の措置とみられる。右胸部の破れは炸裂弾が当たったものか。

現存品は、明治8年頃の撮影とみられる肖像写真着用の軍衣に同じ。襟・袖口・前立にあったアストラカン毛皮は失われている。

與倉知實の軍服・肖像写真（熊本博物館蔵）

8 指揮官たちのその後

籠城軍のなかで、後に政治家に転身、あるいは要職に昇進した人々・・・
熊本城を守り抜いた功績は大きく、それが栄達の契機となったと考えられる。
注目したいのは、特に重要な任務を担った佐尉官たちが日清・日露戦争では将官として陸軍を統括していることである。

大迫尚敏大尉 千草小学校（坪井口）偵察戦指揮、突圍戦参謀。 籠城中少佐に昇進。
奥 保鞏少佐 突圍隊指揮。
福原豊功大尉 総攻撃時、正面最前線の下馬橋守備。 籠城中少佐に昇進。
小川又次大尉 突圍戦で侵襲隊指揮。
別役成義少佐 工兵第6小隊を率い、熊本城を近代戦用に改造。
中村宗則司契副（大尉相当） 食糧調達を担当。 籠城戦直後に二等司契に昇進。

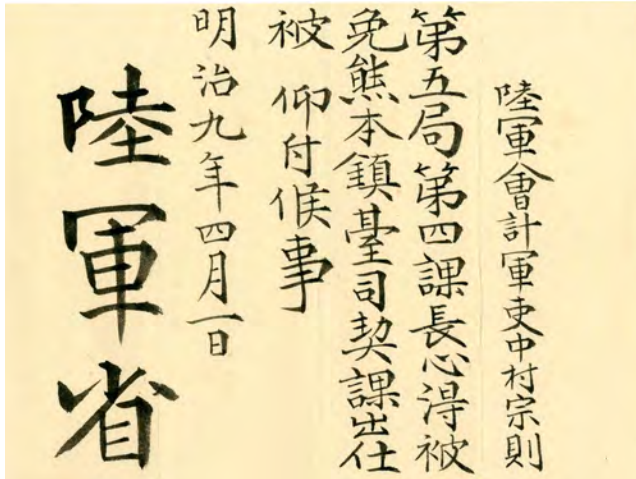


日露戦争記念碑
揮毫「元帥陸軍大将奥保鞏」
（佐賀県白石町 八坂神社）

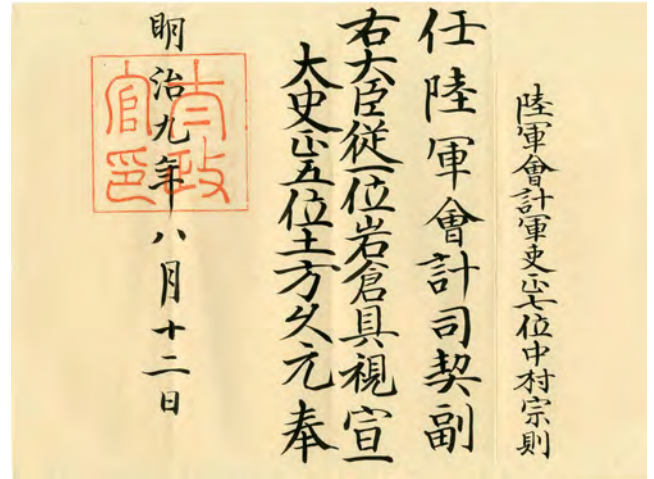
氏名	西南戦争		西南戦争後（M は明治） ＊日清戦争（M27・28），日露戦争（M37・38）
	籠城中	戦功による昇進	
谷 干城	司令長官（少将）	中将	農商務大臣（M18），貴族院議員（M23）
樺山資紀	参謀長（中佐）	歩兵大佐	海軍大将（M 明治 28），内務大臣（M29），文部大臣（M31）
児玉源太郎	参謀（少佐）	歩兵中佐	陸軍大臣（M33），内務・文部大臣（M36），陸軍大将（M37）
大迫尚敏	参謀（大尉→少佐）		陸軍大将（M39）
川上操六	第 13 連隊長（與倉の後任，少佐）	歩兵中佐	陸軍大将（M31）
奥 保鞏	第 13 連隊第 1 大隊長（少佐）	歩兵中佐	陸軍大将（M36）・元帥（M44）
福原豊功	同上（奥の後任，大尉→少佐）		陸軍少将（M27）
小川又次	第 13 連隊第 3 大隊長心得（大尉）	歩兵少佐	陸軍大将（M38）
別役成義	工兵第六方面第 1 園区長（少佐）	工兵中佐	陸軍少将（M23）
塩屋方圀	砲兵第 6 大隊長心得（大尉）	砲兵少佐	陸軍中将（M32）
中村宗則	会計部司契副（大尉相当）	二等司契（少佐相当）	会計部監督長（少将相当）（M28）
綿貫吉直	警視隊総指揮長（少警視）	警視副總監	元老院議員（M19）

熊本鎮台会計部 中村宗則。

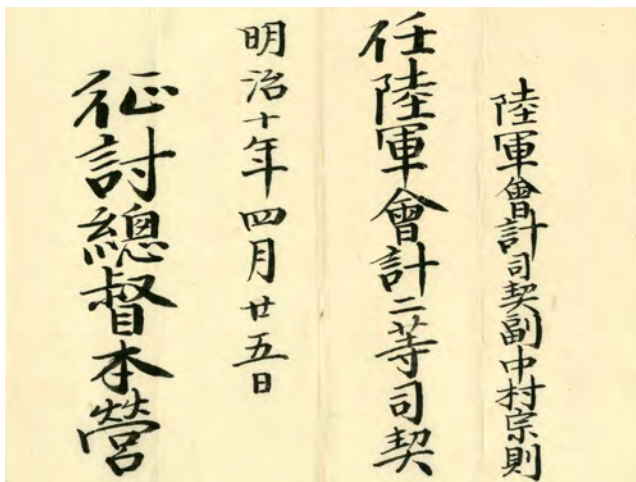
籠城中、最大の課題ともいえる兵糧の調達を担い、その功により籠城戦直後の4月、二等司契に昇進する。西南戦争後は勲四等旭日小綬章を授与。その後も昇進を繰り返し、日清戦争時の明治28年（1895）、ついには会計部の最高位である監督長に昇りつめる。西南戦争での功績が栄達の契機となった。



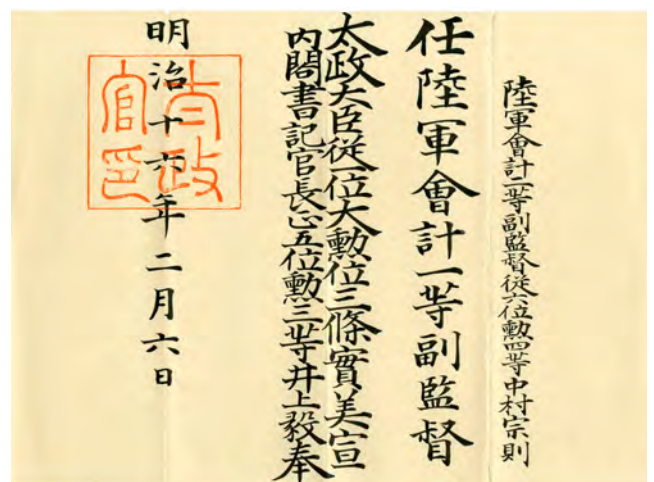
熊本鎮台司契課への出仕辞令（会計軍吏）



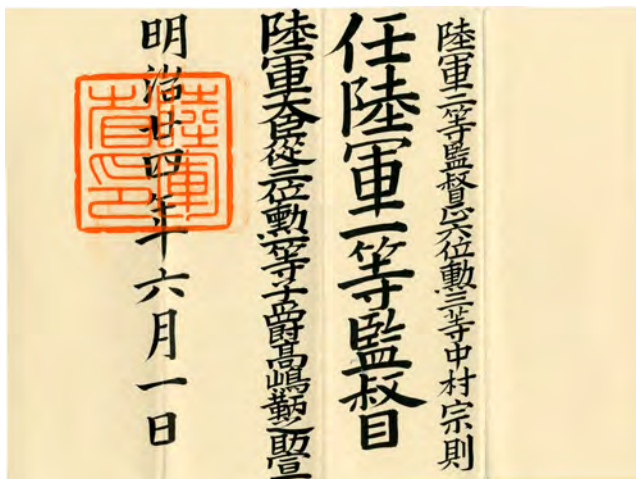
陸軍会計司契副への任官辞令（大尉相当）



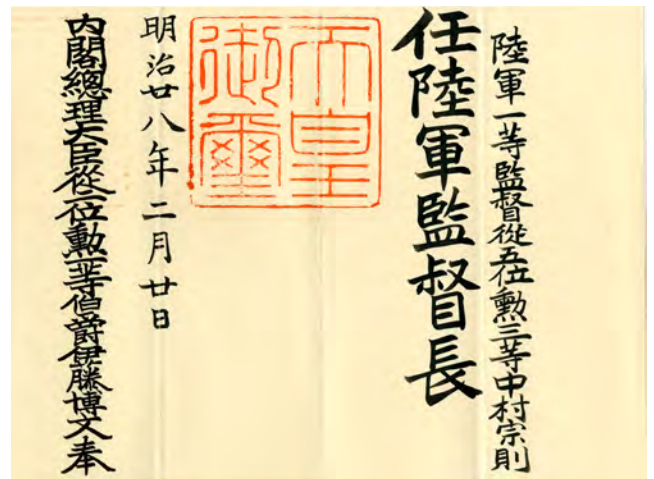
陸軍会計二等司契への任官辞令（少佐相当）



陸軍会計一等副監督への任官辞令（中佐相当）



陸軍一等監督への任官辞令（大佐相当）



陸軍監督長への任官辞令（少将相当）

*二等司契副への辞令は、戦時のためであろう、角印は無い。

監督長の辞令ともなると紙質が厚く、総理大臣奏上のうえ天皇御璽が押されている。